

大学スポーツ集団における組織風土が スポーツの満足度及び継続意図に及ぼす影響

スポーツビジネス研究領域

5015A023-2 霜田 知佳

研究指導教員：作野 誠一 教授

1.本研究の背景と目的

成人の運動習慣について、学生時代の継続的な(中高大)部活動への加入には相関があるという報告がある(文部科学省,1997)。また、部活動は中高校以降の運動習慣を定着させる一つの要因であり(岡田他,2003)、部活動への所属経験があり、そこでの活動の程度が多い、あるいは所属期間が長いほどその後もスポーツを実施する傾向がある(高峰・守能,2000)という事が明らかにされている。これらのことは、学生時代の部活動への所属経験は、成人後のスポーツ実施を規定する一要因であるという事を示唆していると考えられる。このことから、若者のスポーツ実施者を増やしていくためには、大学において部活動サークルに所属している学生が卒業後も学生時代行っていたスポーツを継続していくような方策を検討すべきであると考えられる。

学生のスポーツ継続に関する研究においては、将来的な運動の継続には満足度が関係しており(青木,1989;鶴山・大門,2005)、過去と現在のスポーツ経験の中でも満足度の高い成員はその後のスポーツ活動に積極的に関与していることが指摘されている(青木・松本,1997)。運動部活動における満足度は、その後のスポーツ活動に影響を与えている可能性があると考えられる。

部活動における満足度に関する研究において、永田(1994)は、野中(1978)の概念整理をもとに、クラブ員の意欲に影響を及ぼす競技的運動クラブの組織風土(目標達成風土、集団維持風土)について検討し、満足度が成員の意欲によって規定され、成員の意欲に対してはリーダーシップや組織風土が影響を及ぼしていることを明らかにした。永谷ら(1998)も、野中(1978)の概念整理にしたがい、クラブ員の意欲に影響を及ぼす競技的運動クラブの組織風土(目標達成風土、集団維持風土)について検討し、競技的運動部メンバーの意欲の形成に関わる組織的な要因として、組織風土が成員の意欲の形成に強く影響を及ぼすことを明らかにした。このことから、部活動における満足度を規定する要因として、リーダーシップや組織風土は重要な要因であることが示唆される。

スポーツ集団を対象とした組織風土に関する主な先行研究としては、樋口(1996)、山田ら(2014)の研究が注目される。樋口(1996)は日本学生ラクロス連盟に所属する大学生の女子チームを対象

にして、スポーツ集団における組織風土尺度の作成を試みている。山田ら(2014)は、樋口(1996)の組織風土尺度を用いてスポーツチームの一体感に対して組織風土が及ぼす影響を検討した。その際、組織風土については、樋口(1996)の尺度ではカバーしきれていない側面も存在するため、他の評価尺度を用いるなど、詳細な検討が求められることを指摘しており、スポーツ集団における組織風土の構成概念には検討の余地があるといえる。

本研究では、大学スポーツ集団における組織風土を構造的に把握し、大学スポーツ集団における組織風土の測定尺度を作成する。そして、作成された尺度の妥当性・信頼性について検討した上で、大学スポーツ集団の組織風土が所属クラブへの満足度及び卒業後の継続意図にどのような影響を与えているかを明らかにする。最後に、大学スポーツ集団における組織風土の各構成要因の程度及びそれらが満足度及び継続意図に与える影響について成員の属性ごとに比較検討を行う。

2.研究方法

本研究は、4つの研究(予備調査、研究1、研究2、研究3)によって行われる。予備調査では、大学スポーツ集団における組織風土を構成する要因について、大学に在籍し大学スポーツ集団に所属又は所属経験のある学生へのインタビュー調査から明らかにする。次に、研究1では予備調査で導かれた大学スポーツ集団における組織風土において、各要因の程度を測定する尺度(大学スポーツ集団における組織風土尺度)を作成し、統計的な手法により尺度の妥当性と信頼性について検討を行う。そして研究2では、作成された尺度を用い大学スポーツ集団における組織風土の各要因が、所属する学生の満足度や卒業後の継続意図に及ぼす影響を明らかにする。最後に、研究3では大学スポーツ集団における組織風土の各要因の程度、それらの各要因が満足度及び継続意図に与える影響について、成員の属性ごとに比較検討を行う。

なお、本研究では先行研究を踏まえ、大学スポーツ集団における組織風土を、「大学におけるスポーツ集団に所属し活動している学生が、直接的あるいは間接的に認知し、メンバーの満足、モチベーション、行動に影響を及ぼすと考えられる組織特性」と定義するものとする。

3.結果と考察

1)予備調査の結果

KJ 法による分析の結果、大学スポーツ集団における組織風土として「指導者の介入」「OB の介入」「上下関係(態度)」「上下関係(言葉)」「上下関係(仕事)」「メンバーの信頼関係」「意見の共有」「発言環境」「変革受容」「練習の厳しさ」「公共ルールの順守」「ルール違反」「理不尽な伝統」「異常な伝統」「ペナルティ」「代表者の選抜方式」「ルールによる統制」「優先順位の度合い」「目標の明確性」の 19 の概念が抽出され、「指導者の介入」「OB の介入」「上級生と下級生の信頼関係」「メンバーの信頼関係」「意見の共有」「発言環境」「変革受容」「練習の厳しさ」「コンプライアンスの軽視」「ペナルティの厳しさ」「ペナルティの公正さ」「代表者選出の公正さ」「ルールによる統制」「目標の明確性」の 14 の上位概念に分類された。

2)大学スポーツ集団における組織風土尺度の妥当性と信頼性の検討(研究 1)

A 大学で得られたデータを用いて、霜島・木村(2013)の手続きを参考に、大学スポーツ集団における組織風土尺度の妥当性と信頼性の検討を行った。まず、統計ソフト Amos にて確認的因子分析を行った上で、収束の妥当性および弁別的妥当性を検討するために因子負荷量、AVE、相関係数を算出した。また、尺度の信頼性は Cronbach α 係数を算出することにより検討した。

59 項目 14 因子に対し、確認的因子分析を行った結果、CFI の値が基準を満たさなかったことから、狩野(2002)の指摘を踏まえ、計 26 項目を削除した。残された 34 項目 11 因子に対し、再度確認的因子分析を行った結果、一定のあてはまりの良さが確認された。一部の因子以外の AVE については基準を上回る結果となり、構成概念の収束的妥当性を有していることが示された。弁別的妥当性については一部の因子においては確認されなかったものの、概ね弁別的妥当性は確認された。Cronbach α 係数は、一部の因子において基準値を満たさなかったものの、それ以外の因子については基準値である .70 を超える結果となり、一定の信頼性を有していることが示された。

同様の分析を B 大学で得られたデータを用いて行った所、検討の余地はあるものの一定の妥当性と信頼性が示された。

3)大学スポーツ集団の組織風土尺度が満足度・継続意図に及ぼす影響(研究 2)

共分散構造分析により、作成したモデルの分析を行った。分析の結果、満足度に対しては「信頼関係」が「愛着要素」を介しプラスの影響を与え

た。卒業後の継続意図に対しては「信頼関係」がプラスの影響を与えるとともに、「スポーツコミットメント」を介すことでより強い影響を与えていた。その一方で、「指導者の介入」、「変革受容」、「練習の厳しさ」は卒業後の継続意図に対してマイナスの影響を与えた。また、内在化要素に対しては「信頼関係」がプラスの影響を与えていた。

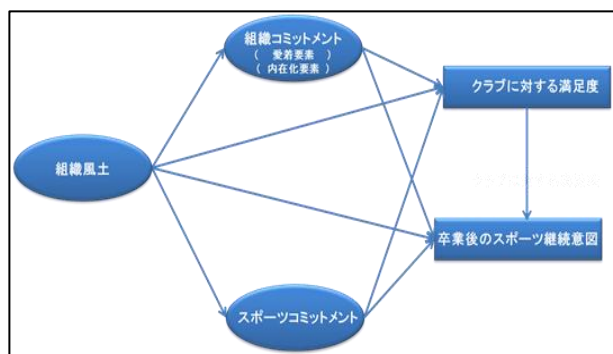


図 1 分析モデル

4)属性別の比較(研究 3)

大学スポーツ集団における組織風土の各構成要因の程度、およびそれらが満足度及び継続意図に与える影響について、成員の属性ごとに比較検討を行った結果、全ての属性別モデルにおいて「スポーツコミットメント」が卒業後のスポーツ継続意図に対してプラスの影響を与えていたことが明らかになった。また、「スポーツコミットメント」は「卒業後のスポーツ継続意図」との結びつきが強いことから、「信頼関係」は卒業後のスポーツ継続にとって重要な要因であると考えられる。

4.結論

研究 2、研究 3 を通して、「信頼関係」は「スポーツコミットメント」を媒介し、卒業後の継続意図に正の影響力を持っており、直接的にも卒業後の継続意図に正の影響力を持っていることが示された。一方で、「練習の厳しさ」は卒業後の継続意図に負の影響を持っていることが示された。

組織風土は組織コミットメントに影響し、「愛着要素」はクラブ活動への満足度に正の影響を持っているが、満足度は卒業後の継続意図に影響していなかった。すなわち、組織コミットメントを高めることはクラブ活動への満足度を向上させるが、結果として、それは卒業後の継続には繋がらない可能性が高いという事が示された。卒業後のスポーツ継続のためには、成員同士の「信頼関係」の重要性が一貫して示されたと言えるだろう。